第19章

鹿町の歴史と文化財

鹿町の位置

この地域の小中学校

小学校：鹿町小学校、歌浦小学校

中学校：鹿町中学校

第19章　鹿町の歴史と文化財

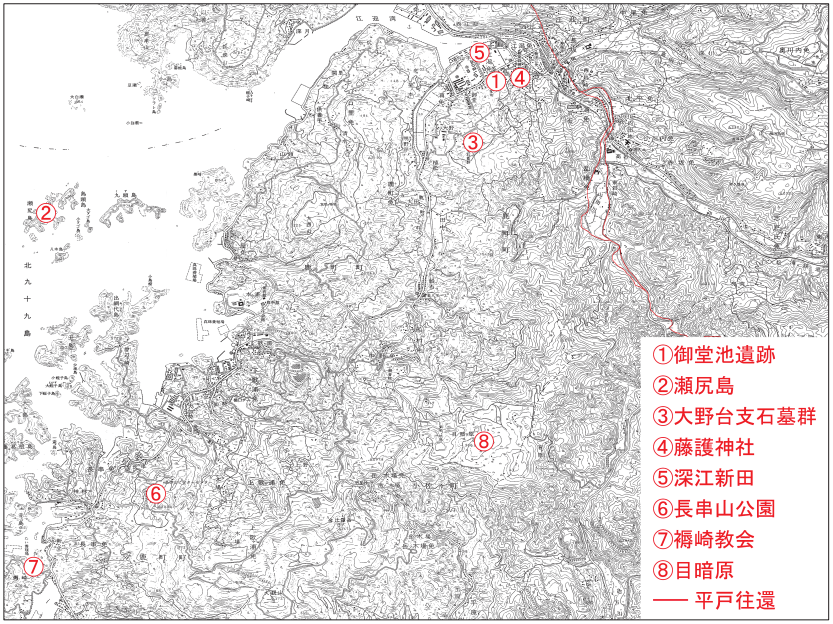
町から市へ

鹿町は北松浦半島の西側に位置し、北は平戸市、東は江迎、南は小佐々に囲まれていて、およそ5,000人が生活しています。町内は海岸から山までの距離が非常に短いために平地が少なく、海岸は深い入り江となっています。沿岸には約15キロメートルにわたってたくさんの島々が浮かぶ北九十九島があります。これらの島々や海岸には複雑に入り組んだ[1]リアス式海岸があり、一部の海岸には化石が見られます。

鹿町遠望

鹿町は、1889年（明治22）に北松浦郡鹿町村として誕生し、1947年（昭和22）に鹿町（ししまち）町となりました。さらに1958年（昭和33）に鹿町（しかまち）町に改名し、以来52年間北松浦郡鹿町町でした。そして、2010年（平成22）3月に北松浦郡江迎町とともに佐世保市と合併して、佐世保市鹿町町となりました。

1　鋸の歯のように複雑に入り組んだ入り江のこと。リアス式海岸では波がおだやかで水深が深いため、沿岸漁業や養殖などの漁業が行われる。



鹿町の地図

鹿町の由来

江戸時代の始まる頃、平戸藩田平筋14ヵ村のなかに「鹿町村」の名前が見えます。ところが、1645年（正保2）の絵図には「鹿待村」とも表記されています。

これは、単純に「町」を「待ち」と聞き間違えて記録したものかもしれませんが、平戸の殿様が「鹿狩り」を行うために鹿町あたりで待ち伏せして、仕留めたといういい伝えがあり、こうしたことが地名になったのかもしれません。

イラスト：岩男貴美子

石器時代の鹿町

鹿町では、10ヵ所を超える旧石器時代から縄文時代にかけての遺跡が見つかっていますが、これまでに発掘調査が行われた数は非常に少なく、詳しいことはわかっていません。その中で深江の御堂池遺跡からは、縄文時代の[2]竪穴式住居が発見され、縄文土器や土偶も出土しています。その他、町内の郷土史家の方々が発見した土器や石器のなかには、大変貴重なものも含まれていることから、今後の発掘調査で明らかになっていくでしょう。

2　地面を方形や円形に掘り下げ、その中に柱（2～4本）を立てて、地面まで長く延びる屋根を支える。室内にはベッドや炉を作ることもある。

御堂池遺跡の現在

郷土史家が発見した磨製石斧

瀬尻島

町内で確認されている縄文時代の遺跡は、おおよそ標高150～200メートルの高地にみられることから、当時の人々は獣を捕らえるために適した場所を選んで住んでいたと考えられています。さらに、海岸から約2キロメートル離れた瀬尻島からも縄文時代の遺跡が見つかっていて、当時から舟で移動していたこともわかっています。

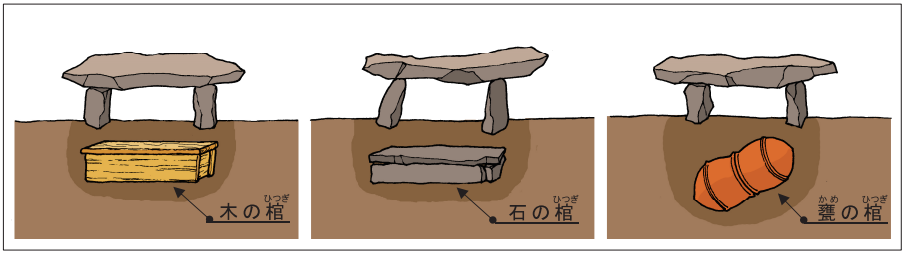
コラム～遺物は落し物？～

遺跡を歩いていると石の鏃などが落ちていることがある。実際は落ちているというよりも、地中から掘り起こされたものである。土器や石器も昔は誰かの持ち物であったため、法律で「落し物」として警察に届け出なければならない。遺跡の発掘調査で出土した土器や石器は、すべて数を数え、警察へ届け出ている。

この土器や石器の「落し物」はお金などと違い、「文化財」ということから教育委員会が保管し、展示などの活用を行っている。

支石墓は語る

支石墓とは、お墓の一種です。縄文時代の終わり頃に朝鮮半島南部から日本に伝わってきました。古いタイプは板状に割った石を箱形に組み合わせた石棺に埋葬し、その上にテーブルのような大きな石（上石）を乗せています。その上石を数個の石で支える様子から、支石墓と呼ばれています。福岡県前原市では、上石が5トンを超えるような支石墓も発見されています。



支石墓のいろいろ

支石墓は、福岡県や佐賀県、長崎県の九州北部を中心として、熊本県まで分布し、弥生時代の中ごろまで作られています。弥生時代のお墓は支石墓のほかに、甕棺（土器で作った棺）や木棺（木の板で作った棺）、石棺など多くの種類があります。鹿町で発見された大野台支石墓群（国指定史跡）は、諫早市の風観岳支石墓群や南島原市の原山支石墓群（いずれも国指定史跡）と並び、長崎県を代表する支石墓群として貴重な遺跡です。

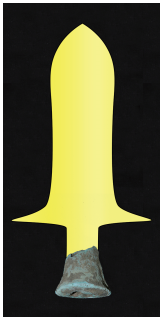
四反田遺跡の石棺墓

（第4章 相浦谷参照）

群集する墓　大野台支石墓群

大野台支石墓群は、北松浦半島で最も大規模な支石墓群で、これまでに約80基の支石墓が見つかっています。現在では、遺跡の周辺は住宅や田畑に変わっている場所なので、遺跡が発見される前に壊されてしまったものもあったと思われます。本来は100基を超える数の支石墓があったことでしょう。

大野台支石墓群

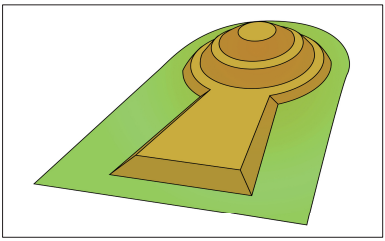


大野台支石墓群出土の銅矛（左）と銅矛復元予想図（右）

大野台支石墓群の発掘調査で出土した多くの土器や石器のなかに、福岡地方で作られたと思われる銅矛（武器や祭器）の一部も出土しており、弥生時代に北部九州と交流があったことがうかがえます。さらに、これほど多くの埋葬を行う人々が暮らしたムラ（集落）が、近くにあったということになります。このムラはまだ見つかっていませんが、縄文時代の住居が見つかっている御堂池遺跡はムラがあった場所かもしれません。

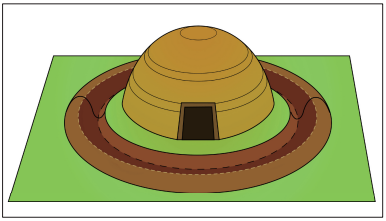
古代の鹿町

鹿町では、前方後円墳や円墳などの古墳や古墳時代の集落は発見されていません。しかし、標高が高い目暗原地区では、古墳時代から平安時代にかけて使用された土器が見つかっていることから、大規模ではありませんが人々が生活していたことは間違いありません。ひょっとしたら古墳も見つかるかもしれません。



前方後円墳

目暗原周辺の表採遺物



円墳

昔ばなし～目暗原ものがたり～

今から800年くらい前のことでしょうか。

長旅で疲れはてた2人のお坊さんが、深い霧に包まれた鹿町の高原を通りかかりました。1人は立派な風格をした光盛というお坊さんで、もう1人は目が不自由で琵琶を持ったお坊さんでした。2人ははるか遠い宇久島を目指して旅を続けている途中でした。

実はこの2人、源平の合戦に敗れた平家の落人だったのです。2人は同じく平家の落人が住むといわれている宇久島に渡ろうとしていたのでした。

突然、霧の中から矢が飛んでくるのと同時に山賊が現れ、2人に襲いかかりました。光盛は激しく応戦し、これに驚いた山賊たちは、山中へ逃げて帰りました。しかし、光盛は歩くことも難しいほどの怪我を負い、残念ながらもうひとりのお坊さんは胸に矢が刺さって亡くなってしまいました。

光盛は運良く村人に助けられ、お坊さんの遺体は持っていた琵琶と一緒に火葬されました。

その時、燃えあがる琵琶から出た香りは、平戸島の志々伎山まで漂ったといわれています。

盲目のお坊さんの宇久島へ行きたいという強い想いが不思議な香りを宇久島に向けて漂わせたのかもしれません。

イラスト：岩男貴美子

その後、光盛は村人たちの計らいで船ノ村中野の薬師堂に住むことになりました。立派な風格を持ち、高い教養のある光盛は村人たちの尊敬を集めるようになり、やがて村人たちに頼まれて船ノ村に住み続けることになりました。

それからずいぶんと月日が流れ、光盛は老僧となり、戦で亡くなった多くの人々の魂を慰めるため祈り続けたのでした。

船ノ村にある「目暗原」という地名も、霧が深くて何も見えない「目が暗い」、または、この地で非業の死を遂げた目が不自由（盲目）なお坊さんを偲んで呼ばれるようになったのかもしれません。

中世の土地開発

現在の鹿町は、中世のころには江迎とともに「深江」と呼ばれていて、支配者の交代や領土争いは江迎と同じ歴史を歩んでいます。

そのような中、田平を本拠地とする峯五郎披の時代に鹿町・江迎の土地開発が大きく進められました。これを裏付けるものとして「鎌倉神社」があります。鹿町に5社、江迎に6社ある鎌倉神社は、いずれも水田地帯にあり、その祭神はすべて峯五郎披を開田・開発の神として祀っているのです。

加勢の鎌倉神社

また、鎌倉神社の「鎌倉」という言葉は、峯五郎披の時代に幕府が置かれた「鎌倉」に由来します。1192年（建久3）に新しく鎌倉幕府が成立したとき、披は田平・鹿町・江迎などの地を治めることを幕府に認めてもらうため鎌倉へ行き、将軍にそれを認められました。この鎌倉幕府に認められたことから、この地区の周辺に多くの鎌倉神社が建てられたのでしょう。

鎌倉神社が建てられている土地は、近世になって開発された深江新田などを除けば、すべてが現在でも米作りが盛んな地域と一致するため、峯五郎披が土地を開いた時期に、米を主とする農業の基礎が作られたと考えられています。

鹿町にある鎌倉神社の位置

深江氏の城

16世紀に直谷城主だった、志佐純元の三男純忠は深江に住み、地名を姓として「深江」を名乗り、深江城を築きました。

深江城の跡は、江迎潟に面した丘陵の北側斜面の先端に残っています。城の前面に広がっていた江迎潟は、江戸時代の干拓により水田に変わり、深江新田と呼ばれるようになりました。この干拓工事に必要な土砂や石材は、深江城一帯から採取されたと伝えられています。その後も鉄道工事や住宅開発などで城跡は破壊されましたが、幸いにも土塁と空堀が約250メートルにわたって残っています。

深江城跡遠景

また、城から南方向に藤護神社があり、この一帯を含む場所が城のあった範囲と考えられています。

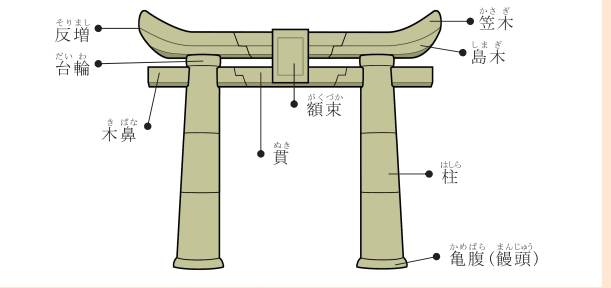
コラム～肥前鳥居～

藤護神社の石段の昇り口には、高さ約3.2メートルの鳥居がある。この鳥居の形式は、肥前地方（現在の佐賀、長崎県）に独特のもので、「肥前鳥居」と呼ばれている。「肥前鳥居」の特徴は、天部の笠木と島木が一体化し、その両端が薙刀形に反り上がっていて、柱、貫、笠木が原則的には3本継となっているところである。

この「肥前鳥居」は、平戸の亀岡神社、佐々の三柱神社などでも見られ、長崎県北部では、平戸藩主松浦鎮信が1528年（享禄元）に建立したことにちなみ、「鎮信鳥居」とも呼ばれる。

※藤護神社の鳥居は1721年（享保6）、1821年（文政4）に修復されている。

藤護神社の肥前鳥居
（市指定有形文化財）



鳥居（肥前鳥居）部位名称

江戸時代の土木工事

江戸時代は世の中が平和になったことに加え、江戸幕府の勧めもあり、各藩では領内の開拓に多くの力を注ぎました。その中でも米は江戸時代の経済の中心となる作物だったため、平戸藩も領内各地で盛んに新田の開発を行っています。最初は藩直営で新田開発を行いましたが、その後は民間で行うことが多くなりました。深江新田は3年の工事期間がかかり、1809年（文化6）に完成しています。堤防の長さは3,240メートル、田は50町歩（約500,000平方メートル）と規模の大きいものでした。

そのほか、歌ヶ浦などの新田が開発されましたが、海岸近くまで丘陵がせまり土地が狭かったため、いずれも小規模な開発となっています。

深江新田

新田の石垣

櫨方役所

江戸時代の終わり頃の北鹿町地区には、櫨方役所と呼ばれる役所が置かれていました。当時、平戸藩では「[3]蝋」の原料として「ハゼノキ」という植物の栽培をすすめていました。鹿町の鳥打地区から大屋敷地区一帯にハゼノキが植えられ、その実を役所で収納・管理していたことから、櫨方役所と呼ばれていました。

ハゼノキの紅葉

ハゼノキの実

3　ロウソクやワックスの材料となる。

日本一の測量士来る

江戸時代の末期、17年にわたって日本全国を測量していた伊能忠敬が、鹿町に来たのは1813年（文化10）正月のことです。伊能忠敬が作成した測量地図は、現在の地図と比べてほとんど差がないといわれるほど正確で、明治時代になっても長く使われました。当時の幕府はこの地図を秘密扱いとし、国外へ持ち出すことを固く禁止していました。長崎のオランダ商館の医師だったシーボルトは、この地図を国外に持ち出そうとしたことが発覚し、国外に追放されてしまいました。（[4]シーボルト事件）

伊能忠敬による長崎県北部の測量は、海岸線と平戸往還の2隊に分かれて行われました。また、当時の測量には、土地の緯度と経度を知るために星座を観察する必要があったことから、鹿町から江迎に戻って木星を観察したことが日誌からわかっています。

木星観測の地

4 ドイツ人医師シーボルトが帰国する際に、伊能忠敬が作成した日本地図「大日本沿海輿地全図」を持ち出そうとしたことが発覚し、シーボルトと親交のあった人々が多数逮捕された事件。シーボルトは妻と娘を日本に残したまま国外追放処分となった。1858年（安政5）の日蘭修好通商条約の締結により追放は解除されて再び日本を訪れ、娘との再会を果たしている。

キリスト教弾圧

16世紀に日本に伝えられたキリスト教は、最初は受け入れられていましたが、天下統一を果たした豊臣秀吉によって最初のキリスト教禁止令（天正禁教令）が出され、宣教師の追放や弾圧が始まりました。

江戸時代になると弾圧はさらに激しくなり、多くの人が殉教（宗教を守って死ぬこと）し、カトリック信者は表面上いなくなりました。キリスト教の弾圧は1873年（明治6）まで続き、江戸時代に西彼杵半島の外海地方から安住の地と信じて五島に逃れた信者にも、激しい弾圧が行われるようになりました。

弾圧に耐えかねた人の中には五島を逃れ、他の土地に移り住む人もいました。その中で五島の久賀島や水ノ浦にいた人々が鹿町の褥崎に逃れて住みつきました。彼らの中には五島から逃れる時に、離ればなれになってしまった家族もありました。

褥崎に伝わる民謡に

「親は五島に　子は褥崎　落つる涙は　波の上」

という一節があります。

鹿町に伝わる伝統行事

江戸時代、農民の暮らしは、「日常の衣類は木綿の単衣（裏地の無い着物）を着ること」など衣食住について細かく定められ、厳しく制限されていました。しかし、定期的な休日（村休み）や信仰などの年中行事は認められていて、様々な芸能や行事が生まれました。それらの中には、鹿町で現在も伝えられているものがあります。

かずら舞

元禄年間（1688～1704）のころから船ノ村鎌倉神社の例大祭で奉納されています。当時の神社では祭礼用の御神酒を造る習わしがあり、それを飲んで酔っぱらい、蔓を輪にして首に巻き、鉦を腰に差して賑やかに踊った子ども達の様子を舞ったものです。（現在は未成年の飲酒は禁止されています。）

かずら舞

あやたけ踊り

あやたけ踊り

褥崎地区に伝わる踊りで、キリスト教の信者が禁教の弾圧と迫害に耐えて信仰を守り、その後、信教の自由が得られたことを喜び、唄に合わせて賑やかに踊ったことが、100年以上代々伝承されてきたものといわれています。

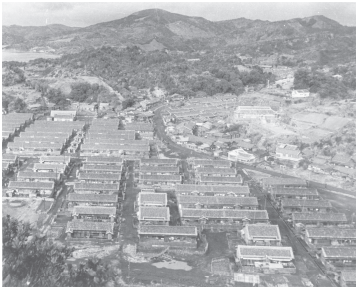
鹿町の石炭産業

鹿町では天明年間（1781～1789）、文政年間（1818～1830）には石炭採掘が始まっていました。鹿町の炭鉱は、古くから四国地方と深い関わりがあったそうです。四国地方は、塩を作る製塩業が盛んな地域で、製塩に必要な燃料として石炭に目をつけた鹿町の人達が、石炭を商品化して四国地方に売り込んだと伝えられています。

近代になり、機関車や船の燃料に石炭が使われるようになると、石炭の需要が多くなり、石炭が採れる地区が海に面していた鹿町は、一度に大量に運べる船での輸送が簡単にできたため、大きく発展していきました。

また、鹿町で採れる石炭には「強粘結炭」という製鉄に欠かせない貴重な種類の石炭がありました。「強粘結炭」は、鹿町と小佐々の全域、江迎、佐々の一部でしか採れず、鹿町ではその中でも良質なものを掘り出しており、全国屈指の優良品として重用されたそうです。

鹿町では明治から大正にかけて、多くの小規模炭鉱が開発されました。さらに昭和へと時代が進むにつれ、国による石炭政策や採掘作業の機械化が進んだことにより、炭鉱の規模や町の人口が拡大していきました。1920年（大正9）に5,802人だった人口は、1950年（昭和25）には20,405人になっています。炭鉱の規模拡大にともない、深江新田や大加勢新田など水田にするために海岸を埋立てて開発された土地も、炭鉱から出る「[5]ボタ」を利用して再度埋立て、炭鉱用地等として使われるようになりました。



昭和29年頃の大加勢地区
鹿町町歴史民俗資料館所蔵

昭和30年頃の
旧日鉄北松鉱業所・鹿町坑
鹿町町歴史民俗資料館所蔵

しかし、江戸時代から始まった鹿町の炭鉱も、1960年（昭和35）頃になると、主要なエネルギー源が石炭から石油へと急激に変わった「エネルギー革命」により、1973年（昭和48）には全て閉山してしまい、経済力の低下や人口の減少など様々な点で大きな影響を及ぼしました。

5 石炭を掘るときに出る質の悪い石炭や岩石、泥のこと。

コラム　～イルカも泳いだ鹿町川～

川の形や使われ方は、時代の移り変わりとともに変化する。現在、鹿町川の水は、灌漑と上水道に利用されているが、昔は船が行きかい、物資の積み込みや荷揚げをするためにも使われていた。

炭鉱が盛んだったころ、鹿町で掘られた石炭は、土肥ノ浦の貯炭場（土肥ノ浦橋の西側付近）に集められ、「[6]上荷船」に積み、末橘沖に停泊して待っている「[7]五平太船」に積み替え、各地へと運ばれた。貯炭場の岸辺は、干潮で水位が低いと船が岸に近づけなかったので、満潮の間に上荷船に荷を積み込まなければならず、火事場のような騒ぎのなかで積み込み作業が進められたという。

さらにその昔、1806年（文化3）から始まる深江、土肥ノ浦の新田開発で鹿町川が現在の流れに導かれる前は、長さが7キロメートルほどあり、河口から約1.3キロメートル上流の植松あたりで江迎湾に注いでいた。

現在の「イルカ淵」付近

そのころの江迎湾は深い入り江で、流域の「舟石」の地名は、船の綱をつなぐための石である「舟石」に由来するとされ、新田がつくられる前は、このあたりまで船の往来があったことを物語っている。

また、植松で海と接するところは川幅が広く、深い淵となっていて、イルカが迷い込んで泳いでいたということから、「イルカ淵」の名が残っている。

鹿町川近辺の人の話では、今から25年ほど前に鹿町川を泳いでいくイルカの大群を見たことがあるそうで、川の形や使われ方が変わった今でも、またいつか鹿町川でイルカが泳ぐ姿を見ることができるかもしれない。

6 底が浅く平らに作られていて、浅いところでも行き来できる船。
7 北松地方では、1710年（宝永7）に五平太という人が燃える石「石炭」を発見したことから、石炭のことを「五平太」と呼んだ時期があった。そのため、石炭を積む船のことを「五平太船」と呼んだ。

新しい地域のまちおこし

鹿町は、漁業を仕事とする人が農業を仕事とする人より多く、北九十九島にある多くの入り江を利用した養殖漁業が特に盛んです。また、長串山公園には4月中旬から10万本のツツジが咲き、県内外から数多くの観光客が訪れ、春の到来を告げる風物詩となっています。

鹿町には国の史跡に指定されている大野台支石墓群がありますが、このほかにもまだまだ貴重な遺跡が眠っている可能性は十分あります。特に縄文時代などに「海の民」が生活した遺跡が発見されるかもしれません。これからはこのような地域の新しい魅力を発掘することが、まちおこしの中で大切になってくるでしょう。

養殖漁業（フグ）

長串山公園

地域の年表

時　代	出　来　事
縄文時代	御堂池遺跡で竪穴式住居に暮らす人々がいた。
弥生時代	約2,200年前　大野台に支石墓群が造られる。
戦国時代	
1558年（永禄元）頃	深江純忠が深江城を築く。
1595年（文禄元）	領内鎮守の神として藤護神社が建てられる。
江戸時代	
1614年（慶長19）	深江城が廃城となる。
1809年（文化6）	深江新田ができる。
1813年（文化10）	伊能忠敬が鹿町の測量を行う。
近代	
1889年（明治22）	北松浦郡鹿町（ししまち）村ができる
1912年（大正元）	鹿町村に初めて電話が開通する。
1914年（大正3）	中野橋（石橋）が完成する。
現代	
1947年（昭和22）	北松浦郡鹿町（ししまち）町となる。
1958年（昭和33）	鹿町（ししまち）町から鹿町（しかまち）町に改名する。
1973年（昭和48）	鹿町町内の炭鉱が全て閉山する。
2010年（平成22）	佐世保市と合併し、佐世保市鹿町町となる。